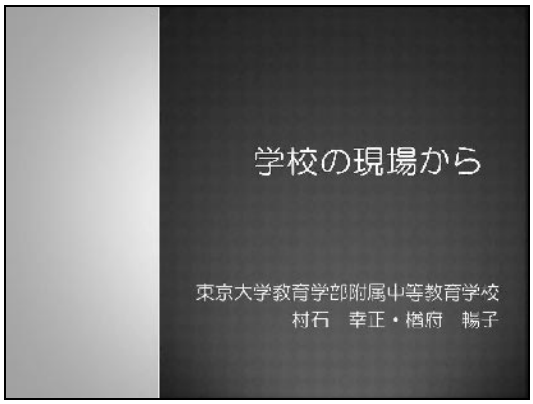
指定討論１「学校の現場から」

村石　幸正・楢府　暢子
（附属中等教育学校）



はじめに

（村石）　昨日亡くなられた中釜先生には、私どものカウンセリングルームである「ほっと・ルーム」のスクールカウンセラーをお世話いただいていました。現在、月・水・金の週３日間、カウンセラー２名体制で朝から晩まで開室しています。

公立学校として週３日間、カウンセリングルームを開室していることは非常に異質に感じられるかと思います。多くのカウンセリングルームは、外部のカウンセラーにかかる場所がただ校内にあって、無料でカウンセリングを受けられるという運用状況になっているかと思います。私どもの学校でも、確かに当初はそのような状況でしたが、週３日、２名体制になり、例えば学年会に出てもらうという構想も踏まえて、本来のスクールカウンセラーとはどのようにあるべきか、どのようにしていくかという、国立の附属学校としての試験的な試みも含めて、中釜先生にご相談、ご指導いただきながら「ほっと・ルーム」の運用も考え始めようとしていた矢先でした。

中釜先生にはイノベーション科研における先導的でチャレンジングな事業も含めて、さまざまなところでお世話になっていましたが、「ほっと・ルーム」の運営に関して中釜先生が突然亡くなられてしまったことは非常に残念です。このような形で中釜先生にさまざまな形でお世話になっていたことをこの場でご報告して、心から中釜先生のご冥福をお祈りいたします。

さて、私ども附属中等教育学校は、国立の附属の中高一貫校です。多分、国立の附属学校と聞くとエリート校だと思われる方が多いと思いますが、私どもは教育研究校であり、実は学力偏差値のあまり高くない学校です。ですから、私どもがこのイノベーション科研で実践するに当たり、「国立の附属の実践だから」という先入観を持たずに聞いていただければありがたいと思います。実践の詳細は、公開研究会に来ていただければお分かりいただけると思います。

イノベーション科研の実践に当たり、連絡・調整をする役割として校内に連携研究委員会を組織しています。その委員長である主幹教諭の楢府先生から、東大附属における実践等に関して報告いたします。

附属学校にとってのメリット

（楢府）　まず、附属学校にとってのメリットをご紹介します（図１）。

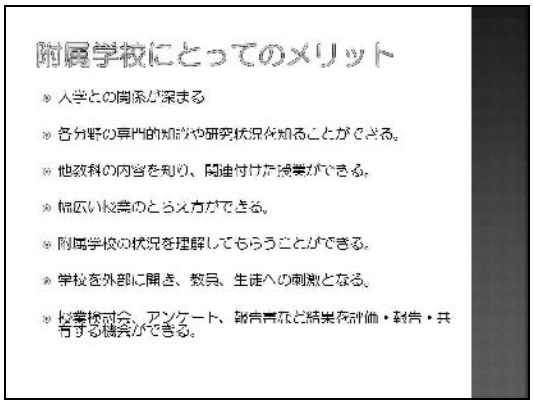


図１

まず、大学との関係が深まりました。本校は本郷キャンパスとは少々離れていて、接点がなかなかなかったのですが、今回何度かの打ち合わせを通して研究等さまざまな話を聞くことができました。また、この研究グループは各自の意志でグループを選んでいたので、普段と違った顔触れでカリキュラムについて語ることができ、結果として他教科の内容を知る良い機会となりました。大学の研究は教科別というような仕切りがないので、私たち自身も広い立場から授業をとらえることができたと思います。

それから、大学の先生方にも中学生や高校生の様子、私たちや生徒とのかかわりについて知っていただくことができました。また、外部講師なども含め、本校の教員以外から授業を受けたり、見学者が訪れたりということが、生徒にも私たちにも新鮮であり、良い刺激となりました。

私たち教員は授業を作ることに追われ、やったら終わりということが多かったのですが、今回は授業後にビデオやアンケート、メモの分析などで学びの過程を振り返り、授業を見直す機会が与えられたことが良かったと思います。

ただ、これは従来の学校にはなかったことですので、その辺のギャップについてお話しします。

各分野の専門性が高い

本田先生の授業から取り上げると、授業内容がある部分に特化している、例えば「抵抗」に関する授業内容は、本当に現在の動向を鋭くとらえ、さまざまな知識や経験を積んだ上に成り立った授業ですが、この授業は誰にでもできるのかと感じました（図２）。マニュアル化された教材や資料で行うという考え方もありますが、通り一遍にやったのではあまり面白い授業にはならない気がします。生徒に響く授業は、いろいろな細かい配慮、ちょっとした仕掛けがあって、教える教員が「何よりもこれを伝えたい」という強い思いがあるところに成立しています。

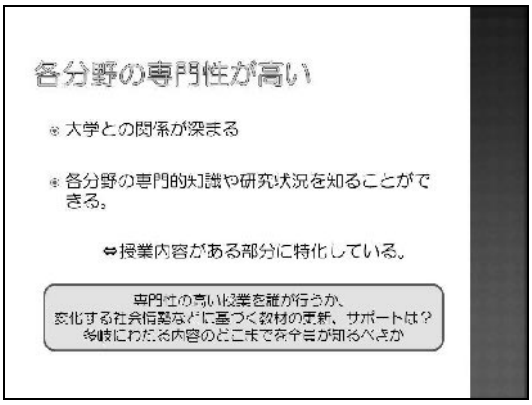


図２

双方向的な授業については、インターネットを使い、生徒の質問に素早く答えられるかどうか。また、生徒同士の話し合いをつなぐスキルに関しても、専門外の者が専門的なことを教えるという困難さはどうであるかと考えました。情報はどんどん変化しているので、このような授業を行うに際しては情報の変化に対するサポートも必要だと思います。

講師の過労という話もありましたが、補助者がいたり、１回のためにたくさんの労力を掛けた結果ですので、一教員が第一歩を踏み出しに

くいのではないかと懸念しています。

「適応」の授業に関しては、あまり教科に縛られていないので、どこで行うかが問題となります。総合的な学習やキャリアガイダンス、ホームルームなどでもできますが、それによって生徒の受け止め方が違ってくる気がします。また、どの学年でするか、回数も１回でいいのかという辺りを伺いたいです。

今回は金融業界を取り上げていただきましたが、例えば農業や芸術的なもの、自由業などさまざまなパターンがあり、その中で幾つ取り上げたらいいか、たくさん取り上げる必要があるか。幾つか選ぶとしたら、選ぶ前に、一般的職業と専門的職業に就くことの間のアプローチ的、橋渡し的なものが必要ではないか。これらの点について、本田先生にお伺いしたいと思います。

教科横断型授業

他教科の点と幅広い授業については、教科横断型授業の課題とも言えるので、秋田先生にお伺いしたいと思います（図３）。

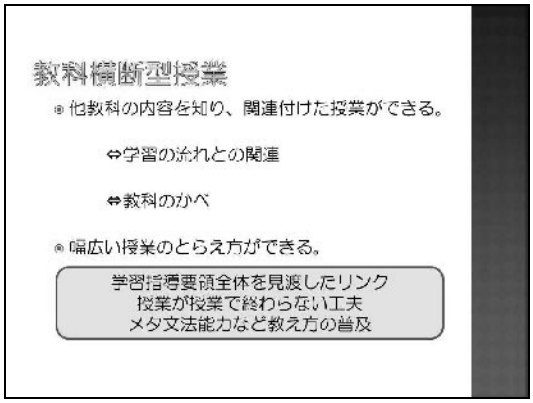


図３

まず「学習の流れとの関連」です。シチズンシップのグループに属する理科の先生が、天気図を学ぶときに、原爆の日の天気図を用いていました。ちょうどそのときに第二次世界大戦の話をしていれば話がつながりますが、明治時代を扱った翌日に突然「1945 年が」と言うと不自然なので、その辺の流れをうまく合わせられるかどうか。逆に、1945 年の内容になったとき、「あのとき理科の時間に天気図の話があったけれど、だからここに黒い雨が降ったのだよ」という一言があれば、生徒の興味・関心や知識への定着も変わってくるとも考えられます。しかし、そのために校内での意思疎通や、情報交換の場所や時間を含めて見つけるのが大変です。ほかの教科を知る方法、学習指導要領全体を見回したリンクのような点について、どうお考えでしょうか。

次に「教科の壁」です。教員側は「英語の先生ではないので英語は使いません」「歴史の時間に出てくる文学作品や美術については、時代、作者、作品名、特徴を覚えればよくて、鑑賞するのは国語または美術の時間だ」というように、そこまで教えればいいという線引きがあります。実は、それは生徒にもあるのです。

家庭科で栄養を教えるときに「炭水化物は $C_6H_{12}O_6$」でとか「不飽和脂肪酸は二重結合が」と言うと、生徒に「化学はやめて」と言われます。また、住居の特徴について、亜熱帯雨林の高床式住居であれば「インドネシアはどの辺にあったかな。緯度は？」と聞きますが、「地理じゃん」と、生徒自身が教科を分けてしまっているのです。秋田先生は小学校の事例もご存じですので、この辺りも合わせて教えていただきたいと思います。

本田先生は「汎用的な能力」とお話しされていましたが、やはり授業が授業で終わってしまい、実践する場がないという問題があります。こうしたことへの対策も考えなくてはなりません。

また、メタ文法能力の考え方や教え方に関して、教科の勉強会はあるのですが、もう一歩進

んで教え方を知る機会はどうしたら得られるかと考えました。

学校の状況

大桃先生や村上さんに伺います（図４）。教員はとにかく忙しく、新しいことを導入する場合には何かを削るとか、その準備や合意を取る時間の確保も大切になってきます。また、学校の中にある文化、伝統、行事などとの兼ね合いがあるので、無理やり入れると続きません。どうやって取り込んでいくか、誰がどういうリーダーシップを取り、どういう組織をつくるかということも問題になってきます。

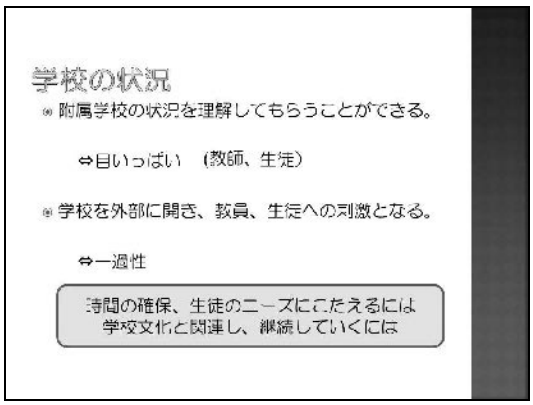


図４

実は、忙しくて目いっぱいであるのは教員だけでなく、生徒もそうなのです。日本は今、飽食の時代ですが、多分、生徒は「飽学」で、学ぶことがありすぎて「別にやらなくてもいい」という状態にあるのではないでしょうか。

例えば、栄養バランスだけを考えて食事を作っても、なかなか食べてもらえない。それは体にいいという理由をアピールし、かつ、彩りやおいしさなど、ほかの部分も出して初めて食べ続けてもらえるのではないかと思います。

これは学校で言うと、「知育・徳育・体育」のようなバランスではないかと思います。授業提案では、コミュニケーションを取るなどいろいろなことを議論したり、書いてまとめて発表したりと多くの要素が加わっていますが、違う見方をすると、教室で先生が指導して、あるいは講師が来て、筋書きが出来上がっている中で考えるという頭を中心に活動しているところが多かったと思います。

広い場所で思い切りボールを追い掛けて、理屈抜きで汗をかいて、それだけで理解できるときもあります。歌を歌って心を一つにするとか、絵を描いたり料理を作ったりして集中しきった後にほっとする時間があるなど、変化がなければ生徒は新しいものになかなかついていけません。授業内容のバランス、頭と心と体を大切にしていかなければいけないと思いました。また、経験上、授業時間と生徒の習得量の間に比例関係が成り立たないことは痛感しているので、生徒のニーズも考える必要があると思います。

また、外部に開くという部分で、最終的には学校の中で行える授業かどうかがポイントになります。さまざまなプロジェクトはきっかけにすぎません。組織の人材やリソース、財政といった必要なもの、また、学校裁量なども含めて、学校の在り方についてお話があればお聞きしたいと思います。

評価

今回、いろいろな自己評価ができましたが、それは直後の結果であって、長期的に良いかどうかを考える必要があると思います（図５）。現在の学力評価は、ともすると偏差値の高い学校に入ったかどうか、それで東京大学を目指すということもあるかと思うのですが、今回の提案はそういう評価には直接結び付かないので、何か適切な評価があればと思います。

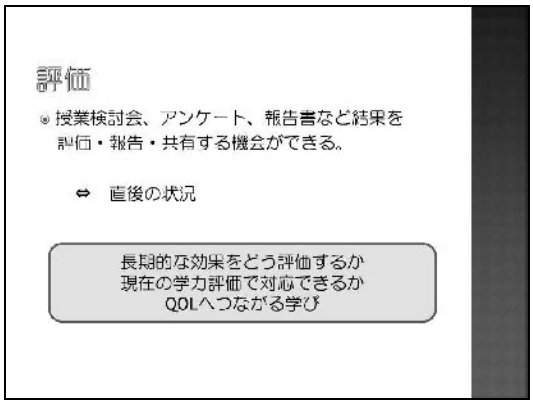
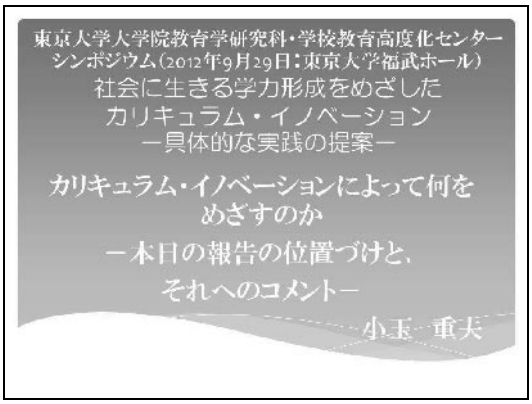


図５

入学試験の在り方まで言及するつもりはありませんが、一人一人が満足できる人生、やりたいことを見つけられること、実現していくための学び、最終的にはＱＯＬの問題につながる学びができればと思います。今日のシンポジウムで、その新しい糸口が見えることを願っています。

指定討論２
「カリキュラム・イノベーションによって何をめざすのか」
―今日の報告の位置づけと、それへのコメント―

小玉　重夫
（センター長・基礎教育学コース）



イノベーションとは

イノベーションとは、もともとは経済学のなかでも、特にオーストリア学派といわれる系譜において提唱されてきた概念です（図１）。後期近代といわれる現代においては、従来のイデオロギーに基づく社会変革の理念とは異なる意味での革新、すなわち「新しい価値を打ち立てる」、「これまでのやり方を変え、新しい何かを始める」という意味で用いられています。われわれの研究では、このイノベーションをカリキュラムに適用することを試みています。